



元気な日



川崎ゆきお

「元気なとき、ありますか」

「たまにね」

「たまですか、いつも元気そうに見えますが」

「本当に、たまですよ。いい状態なんて、年に何度もない」

「そうなんですか」

「年に数回は言いすぎだが、やはり周期があるねえ。病気じゃなくても」

「どんなときが元気ですか」

「それなんだがね、よく分からない」

「あ、はい」

「元気だから、元気になるんだ。これは調子がいいとき、調子がいいんだ。当たり前だね」

「気分的な問題は？」

「ああ、体調が悪く元気もない状態のとき、いいことがあると困るねえ。特に元気が出そうなことと遭遇すると、災難だよ」

「いいことがあると元気が出るのじゃないのですか」

「それとは別だ」

「じゃ、何か持病とか」

「それとも別。だから、よく分からんと言っている」

「はあ」

「元気なとき、元気な事柄と遭遇するといいいんだが、そうとばかりは限らない。そして、元気なときは、余り大した用事はない。パワーがいるようなね。だから、空元気のままだ。これはもったいない。空ぶかしだからね」

「それよりも、元気は何処から出るのでしょうか」

「発生原かね」

「はい」

「分からんが、何となく出てくる。いいことがなくても、悪いことがあっても、それらとは関係なく、元気だけが独立して、行動しているようなものかね」

「それは不思議ですねえ」

「新陳代謝の問題かもしれない」

「バイオリズムのような」

「そうだね、それに近いねえ。だから、気分を高揚させるような元気を注入してもだめなんだよ。気は元気になるが、体が動かんし、無理をして動くと疲れる」

「はい」

「訳もなく、朝から調子がいいときがある。これはそういう周期になっているんだろうねえ。だから年に数回じゃなく、数週間に一度ほど凄く元気な峠がくる。これは何もしていなくても、勝手に来て、勝手に去って行く」

「バイオリズムの周期は、一年、一日、つまり、朝と夜など、細かな周期もありますよ」

「そうだね、一日の中で一番元気なときは起きてから何時間後か、なんてのものもあるねえ」

「僕は午前中、調子がいいです」

「そうかね。私は起きてすぐだ。そのあと、どんどん落ちていく。目覚めたときが一番元気だ」

「血圧と関係しているのかもしれませんがねえ」

「まあ、最初にも言ったように、そういう体調とは関係なく、元気が出入りしているんだ。謎の周期だよ」

「それはオカルトじゃないのですか」

「昔の人は、思い当たることがあるんだろうねえ。何も無いのに元気がある。何も無いのに、元気がない。朝夕関係なくね」

「占いでありますよ。それ」

「しかし、そんなこと知ったからと言って、何ともならんからねえ」

「あ、はい」

「元気がなくてもやらなければならんことはやらないかんしね」

「そうですねえ」

「だから、妙に元気のある日は、贈り物だと思うしかない」

「え」

「神様がくれた贈り物だよ」

「ほう」

「安堵感のある元気な日が確かにある。何も無いのに幸せな気分のときがね」

「あ、はい」

「これはもらい物なので、無料だ」

「あああ、はい」

了